

# 辛亥革命期の山東省における民衆運動

加 藤 直 子

## はじめに

変革主体としての民衆の主体形成を歴史研究の基礎的視座として、近代中国の発展を総体的に把握すべきだとの問題提起を行なったのは、里井彦七郎氏の論文「中国近代化過程に関する三つのとらえ方について」であつた。<sup>(1)</sup>これは、狭間直樹・石田米子両氏の先駆的研究を「新しい胎動」として積極的に評価したものだったが、以後辛亥革命時期の民衆運動に関する幾多の研究成果が発表されている。<sup>(2)</sup>但し、「後進地帯」とされる華北におけるこの時期の民衆運動については、その社会経済史的分析の後れと相俟って、僅かに狭間・嶋本信子・内山雅生の三氏の研究があるのみである。<sup>(3)</sup>

本稿は華北の中でも山東省を取り上げ、辛亥革命前の民衆運動を考察する。一九一〇年代初頭の山東を扱った内山論文と重複する部分もあるが、ここでは義和団運動を経た山東民衆が展開した

具体的闘争そのものを対象とする。考察に当っては、孤立分散的な個々の運動をつなぐものがあるとすれば、それは一体何なのかという民衆運動自体の問題、更にそれらの諸闘争が支配階級各層をして如何に対応・譲歩せしめたかに留意し、当時の山東社会全体を検討する手掛りとした。

もとより、これらの分析がさまざま辛亥革命の史的究明につながるものではない。辛亥革命は、中国近代の変革過程の統一的把握の中にその意味を求めるべきものだからである。それにも拘らず、この時期の山東民衆運動を取り上げるのは、義和団運動より辛亥革命を経て、袁世凱の政權掌握、二十一カ条問題から五四運動へと、山東が常に半封建半植民地中国の矛盾の一点であった為である。山東における変革主体としての民衆の闘争を考察することは、近代中国の歴史的発展過程を究明する上にそれなりの意味を持つものと思われる。本稿はその作業の為の一階梯である。

## 一 清末山東農村社会の状況

山東を含めた近代の華北農村経済に関しては、先ず戦前の数多くの調査研究の成果があり、それらを批判的に継承した最近の研究<sup>(5)</sup>により、農業経営の構造分析も試みられている。民衆運動を検討する上で、その背景としての経済的分析を怠ることはできないが、今ここで十分に論じる準備もない為、従来の諸研究を参考としつつ、清末の山東農村社会の状況を概観したい。

表Ⅰは山東各地を六区に分けて各区から適宜に一県を抽出し、その土地所有形態を表わしたものであるが、山東農村においては自作農が圧倒的多数を占めていたことは明白である。但し、それは決して土地分配の均等を意味しない。表Ⅱに拠れば、三十畝未満の農民が過半数を占め平均して七割、その半ば以上が十畝未満の極貧農であり、その農業経営が如何に零細であったかを窺い得る。

零細な自作農は「土地所有者」であった為、高額の錢糧、徵税人の中間搾取、「新政」下の苛捐雜税等、支配者層の飽くなき収奪を受けねばならなかった。民衆には只負担増加でしかないこの「新政」とは、本格的植民地化に対応して清朝が自己の支配体制の再編を図ったものであるが、現実には反って自滅せざるを得なくなっていくのである。

更に、自己の所有地のみでは生計を維持するに十分な再生産をなし得ない零細自作農は、<sup>(7)</sup>「中国農村では貧農、雇農、苦力とい

う三種の名称は、多くの地域において区別されず<sup>(8)</sup>」と言われる如く、一方で長工・短工等の雇農として自村や附近の農村で農業労働に従事し、他方では表Ⅱのような小商売や雑業労働に従事する苦力となった。又、「山東苦力」として東北等の地方へ出稼ぎに行く者も少なくなかった<sup>(9)</sup>。このような零細自作農は、その所有地のみでは生活不可能であり、賃労働により辛うじて日々の糧を得ていた半プロレタリアートの存在であった。そして、こうした状況は、彼らが「資本の為の隷農<sup>(10)</sup>」として既に世界資本主義体制に組み込まれていたことを示している。

帝国主義支配の農村浸透は、一九〇〇年以来本格化し、特に鉄道開設は農村の貨幣経済化の一大原因となったと言われる<sup>(11)</sup>。農業経営は、より収益のあがる落花生、棉花、煙草の如き商品作物の栽培へと転換していった。而もその傾向は貧農ほど強く、到底一家の食糧も賄いきれぬのに、できるだけ多くの商品作物を栽培して現金を獲得し、遂には出来秋に自家用までも換金してより粗悪な食物を購入する、という状態にまで追いこまれてしまおうと言われる<sup>(13)</sup>。農民は一段と窮乏し、土地喪失者が増大して、小作人や雇農となる機会の乏しい当時の山東農村には遊民が増加した<sup>(14)</sup>。

さて、農村に於ける様々な矛盾は、自然災害の際に最も顕著な形で現れる。山東では天災は大小の差こそあれ年々の出来事であったが、中でも一九一〇年を挟んでの三年間の災害は、山東社会の矛盾を一挙に曝け出すものだった。<sup>(15)</sup>『順天時報』の伝えるところによれば、一九〇九年以来山東各地は旱害、雹害に見舞われ、

表1 山東各地農家自小作別百分比

(1917年)

県名	全農家戸数(戸)	自作	小作	自小作
A 章邱	69,339	68.05%	13.64%	18.31%
B 萊陽	94,000	73.68	9.16	17.16
C 惠民	56,370	78.77	6.86	14.37
D 聊城	31,743	76.27	10.31	13.43
E 金郷	39,760	71.73	16.14	12.13
F 費県	76,908	71.50	15.71	12.79

『第六次農商統計表』1920年, 16—20頁(天野元之助『山東農業經濟論』附表3)より作成

表2 土地所有別農家戸数百分化

(1917年)

	10畝未満	10畝～	30畝～	50畝～	100畝～
A	49.86%	30.91%	12.84%	4.36%	2.03%
B	25.36	25.85	31.28	15.83	2.26
C	32.92	41.61	13.12	7.92	2.01
D	23.93	26.81	26.69	13.17	9.40
E	29.06	43.16	19.23	5.86	2.70
F	68.02	19.94	8.02	2.99	1.02

『第六次農商統計表』72—74頁(上掲書, 附表4)より作成

表3 山東の短工の傭主なき時の状況

報告県数54

	小資本販売	柴糞拾い	手仕事の手芸	交通運輸	失業	その他	計
実数	37	25	12	7	8	10	99
%	37.37%	25.25%	12.12%	7.07%	8.08%	10.10%	100%

天野元野助上掲書210頁

その被害は農作物の収穫が平年の僅か五割という大ききであつた。兗・曹・沂・濟寧州地方で最も甚しく、特に商業の発達した濟寧では、物価が平常の三・四倍から五・六倍に急騰した<sup>(16)</sup>。更に、豊年であっても自給量に満たないという登州や萊州は、穀物の不足分を毎年東三省に依存していたが、奉天が雜穀の省外移出を禁じたことにより、糧価は一段と高騰した<sup>(17)</sup>という。

こうした物価騰貴は、山東各地民衆に深刻な影響を及ぼしたことは言うまでもないが、それは単に天災のみに因るものではなかった。『順天時報』は、

海陽県境地半沙磧、五穀本不能十分收成。近年来、又以花生<sup>(18)</sup> 価値日昂、故多改種花生、而本地之糧愈不敷用。現在糧価亦甚昂。

と、土地が痩せて十分な収穫も得られぬ海陽県においてさえ、落花生が植えられ、主食たる五穀は一層不足し、糧価は著しく騰貴したことを伝えている。先述の如く、商品作物の栽培は殊に零細自作農ほど盛んであり、彼らは雜穀を購入して生活していた。糧価騰貴はそうした農作物の商品化にも因るものだったが、その影響を最も深刻に受けるのは、貧農層以下の民衆であつた。

糧価騰貴は又、官紳支配者層の「新政」実施にも起因していた。山東の糧価の「増漲」には以下の二原因があるという。

一由糧米出境每石抽税一百文、作為商立学堂公歛。<sup>(19)</sup> 一由糧行出售糧米每千文抽制錢數文、以作議事會公費。

糧米の出境や商人が売り出す際にまで公費として賦課された税は当然糧価を暴騰させ、又しても民衆は苛捐雜税の為に辛酸を嘗め

ねばならなかった。

斯くして、半封建半植民地社会の矛盾は災害を数倍に拡大したのである。沂水県では「樹皮、木葉、草根、野菜之類」は残らず食べ尽され、<sup>(20)</sup> 濟寧州でも同様であつた。<sup>(21)</sup> 食を求めて流浪する者は途に絶えず、「号泣の声、耳に忍びず」という状況だった。<sup>(22)</sup> 更に他省からの難民流入も加わり、正に山東社会は「激変」を醸成せんとする危機的状态にあつた。<sup>(23)</sup> これに対する官紳支配者層の対応は、「平糶局」により貯蔵穀物を時価より安価に民間に払い下げるといふものだったが、<sup>(24)</sup> その「平糶」も大地主層の援助により辛うじて運営されていた。<sup>(25)</sup> その上、煙台の「紳董」による「粥廠」が供給されないのに憤った飢民、難民により襲撃された例をみれば、<sup>(26)</sup> その限界は推して知るべしであつたと言う他はない。

ここに、常に慢性的飢餓を内包する山東農村社会の諸矛盾を、大災害の中で激化した形で確認することが可能となろう。義和團運動後の帝国主義の農村への浸透、「新政」実施下の苛捐雜税は、帝国主義、封建主義と民衆との矛盾を極度に激化させつつあり、そうした現実の只中で民衆の反帝反封建闘争は闘われたのである。

## 二 濟寧・曹州屯民闘争と「曹匪」闘争

辛亥革命前の山東における民衆運動を考察する際、民衆の巨大な反帝闘争であつた義和團運動の残した影響を抜きには考えられない。

義和団の民衆運動を経験したドイツは、一九〇〇年以降の、特に日英同盟の締結及び日露戦争を経ての国際状況により、軍隊によるあからさまな植民地支配の姿勢を見直さざるを得なくなっていた。<sup>(27)</sup>しかし、他方一八九九年に設立された中徳鐵路公司により義和団後急速に建設を進められた膠濟鐵道は、一九〇四年に運行を開始し、ドイツの経済的地歩を確固たるものとした。これは山東農村の商品経済化、沿線の鉞山開発、商埠開設（一九〇六年）と相俟っての外国人居住者の急激な増加と商業、貿易の発達等をもたらし、<sup>(28)</sup>帝國主義の山東社会への浸透は現実には義和団運動以降一段と強化されていった。更に、本格化した帝國主義支配に対応して清朝が行なった「新政」は、苛捐雜税により山東民衆の生活に直接に脅かしていた。以下に取り上げる山東西南部一帯の屯田民衆の闘争は、こうした状況下に展開された反帝反封建闘争である。

清朝は光緒二十八年（一九〇二年）正月の上諭を以て衛所屯田を廃止し、屯糧を地丁に改めて州県官に徴収させ、完全な民田とする<sup>(29)</sup>こととした。これを承けて山東巡撫周馥は、済寧・曹州一帯の衛所屯田の納税を民田と一律にすることを知州に依頼して各屯長に交渉し、一応の承諾を得たが、問題は「屯価」「田価」と呼ばれる屯田の地価の徴収にあった。<sup>(30)</sup>周馥は民屯・軍屯を問わず上地、中地、下地に分別し、各々に応じて毎畝制錢三千文より一千文に至る地価を五年を期限として各屯長より徴収することにした。<sup>(31)</sup>当時山東は、日露戦争により東北からの雜糧輸入が杜絶えた

為に、糧価騰貴に苦しんでいた。<sup>(32)</sup>民衆の貧苦は言うまでもなく、更に「屯価」徴収の報を聞いた屯民が、光緒二十九年春、済寧に於いて「聚衆數千人」と言われる反対行動を起した。<sup>(33)</sup>

これに対し、早くも「激変之勢」を看取して周馥を批判し、税契・昇科が民田と等しく行なわれている山東について「屯価」の免除を請願したのが、給事中艾慶瀾の上奏（光緒二十九年六月）であった。<sup>(34)</sup>しかし、戸部は審議の結果上諭に準じた「屯価」の徴収を再確認し、政府が周馥に地方の状況に応じた処置をとるようにとの訓令を発したのみで、依然として「屯価」を課せられることになった屯民たちは、翌光緒三十年、済寧次いで曹州一帯で反「屯価」闘争を展開していった。

済寧には臨清・済寧の両衛があり、当時屯田地は合計約八百四十三頃六十一畝、臨清衛には約四百八十四頃七十九畝の軍田地もあったという。<sup>(36)</sup>済寧衛属の三里屯屯長牛兆驤と地保徐長貴は「屯価」に抗議して訴訟を企て、屯民李兆徴等の讒訴により州官に逮捕された。これを知った馬房屯の戈懷仁らを中心とする屯民は、一月十六日州署に集合し、彼らの釈放を要求して知州の衣類その他を焼毀した上、牛兆驤等を逃がし、戈懷仁たちも逃走した。そこで兗沂曹済道張蓮芬が鎮圧に向かい、各屯長を説得し、屯民李広新などの自首を経て、事態は一応の收拾をみたかのようなだったが、民衆の怒りはもはや頂点に達しており、屯長張鑑堂等の勸諭にも服さず、戈懷仁等を中心に一層激烈な闘争が爆発しようとしていた。既に闘争は屯民のみでなく、兗・曹州一帯の「巨匪」趙

二等の参加を得ており、周馥は按察使尚其亨を弾圧に派遣した。その結果戈懷仁、趙二は逃亡し、「巨変」を恐れた屯長李模庵等の調停によって屯民は「屯価」の納付と期限の延長を申し出、五年の期限を七年とすることが認可されて、鬭争は一応収束した。

以上は周馥の報告に基づいた鬭争の経緯である。<sup>(37)</sup> 周馥は知州姚聯奎の「弁理不善」<sup>(38)</sup>を上奏し、『順天時報』の「山東民変」なる記事も民変の原因を知州に帰しているが、本来の原因は「屯価」<sup>(39)</sup>にある上、政府は艾慶瀾の上奏に対しても依然として「屯価」実施を指示したのであり、済寧鬭争は反「屯価」鬭争であり、反政府鬭争であったといえよう。

さて、済寧では一応の収束をみた「屯価」反対鬭争の火の手は曹州へと移っていった。中でも鄆城県では同年三月、「屯価」に抗議する県境の屯民二千余人が、屯長任青和の下に集合した。<sup>(41)</sup>その勢いに驚愕した知県が巡撫に報告すると、先に済寧に派遣された尚其亨が四日鄆城へ到着した。彼は屯長十余人に対して「体恤之語」を以てし、各屯長は悔悟して止まなかったという。只、任青和だけは反って他の屯長を叱咤した為、「凶狡異常、必ず異謀有らん」とみた尚其亨によって逮捕され、省城に護送された。尚が鄆城を去ると、屯民二千余人は武器を携帯して県城を包囲し、任青和の釈放を要求したが、既に省城へ護送されたと知らされ屯民は漸く解散した。任青和は処刑され、「屯価」に関しては済寧と同様の処置がとられることとなった。

当時の支配者層は、済寧鬭争において「巨匪」に「煽惑」の罪を被せたが、同様の煽動者とされたのが任青和であった。済寧府

知府代理黄麗中の報告によれば、任青和は当時四十八歳で、

光緒二十六年間、曾入大刀会、即義和团。本年二月、伊因聞  
済寧屯案了結、心懷不甘、起意借抗繳屯価為由、逼脅本境二  
十四屯、斂錢二百四十千文入手、……<sup>(43)</sup>

とある。更に周馥は上奏文の中で、

查驗伝單、語多狂悖。查該犯任青和、即任青合、又名任建杰  
係拳匪余孽、妄称屯価係為賠教、輒敢斂錢聚衆、希圖倡亂、<sup>(44)</sup>

と述べているが、「拳匪余孽」の任青和一人に「斂錢滋事」「希圖倡亂」の罪が帰せられている。屯長ではあったが屯田も十余畝を余すのみとなっていた任青和は、<sup>(45)</sup>屯長への懐柔がなされた際にも一人断固として応じず、拘禁されて「屯価」の承認を迫られても、屯民との「公約」を堅持して屈服しなかった。<sup>(46)</sup>飽く迄支配者層の末端で動揺する他の屯長と、屯民を代表する任青和との溝は歴然としている。然も注目すべきは、「屯価」徴収は「賠教」＝義和团賠償金の為であると断言していることである。それは周馥が言う如き妄言では決してなかった。

義和团運動の敗北によりもたらされた巨額の賠償金は、各省に割り当てられ、結局は民衆の負担をさらに増大させた。他方、義和团運動、そして弾圧を経た山東民衆の「洋鬼」への憎悪は、沈黙を余儀なくされて一層強烈になっていったと思われ、その意味では山東民衆全てが義和团の「余孽」であった。従つて、かつて義和团に参加したと言われる任青和が、「屯価」は賠償金に由るものと把握したのは何れにせよ的確であり、又屯民の擁護を受け得たのは、「屯価」反対鬭争と反「洋鬼」という民衆の意志を結

合した形で、彼がより明確に代弁していた為であった。このようにして、済寧に始まり鄆城、濮州など曹州一帯へ拡がった反「屯価」闘争は、山東民衆がその主体性に於いて義和団運動を継承しつつ、反帝反封建闘争を進展させていったことを示すものであった。<sup>(48)</sup>

ところで、済寧において「巨匪」趙二等の参加がみられたと同様、任青和と「結党抗官」した王際明なる「著名土匪」が存在したことが、一九〇六年に起った「曹匪」闘争の鎮圧に当った巡撫楊士驤の報告中にある。それに拠れば、王際明は任青和等の闘争に加わって後、逃走していたが、一九〇六年に曹州の原籍へ戻り「同心義気会」を創設して「滋事」したという。更に巡撫は、王を処刑したが「曹・亮本より多盗の区」であり、教会も林立している故、監視を怠ることはできないとも記述している。<sup>(49)</sup>そこで、山東農村と「土匪」との関係を、この曹州一帯の「曹匪」闘争を手掛りに検討してみたい。

「匪徒淵藪」と称される該地は、一九〇六年には麦の収穫が不良で「鉅案」が続出し、「曹属十一州県幾んど地に匪無きは無し」という状況を呈していた。<sup>(50)</sup>この「曹匪」に関して楊士驤は、該匪始則劫掠為事、尚是迫於飢寒。繼則糾脅日多、実属行同土寇焚殺槍架。<sup>(51)</sup>

と報告し、貧困からの盗みが一時的なものに終らず、本格的「土匪」へと発展した状況を伝えている。更に「聚まれば則ち匪と為り、散ずれば則ち農となる。故に勦捕亦頗る易からず」とある如く、「土匪」は正に農村内部から析出されていき、基本的に農民

であり、農村に活動基盤を持っていた。彼らは「高粱野に遍く、且つ賊は莊内に拠り、措手に易からず」とか、「股匪一たび官兵の撃を経れば散じて輒ち村寨に逃入す」というゲリラ戦を展開しその弾圧は頗る困難とされた。一たび団結した民衆は「秩序」の枠を超越した「匪」と見なされるが、散じては農民となる「土匪」の潰滅には「清郷を弁理して以て匪源を清す」という方法より他になかった。<sup>(55)</sup>これは「稍操切に涉れば玉石俱に焚き、稍遲きに涉れば燎原患と為る」という実に厄介なものであった。しかし、この「清郷」こそ「土匪」が基本的に農民であり、農村と切り離しては考えられぬ存在であったことを明示しているとは言えないだろうか。

それならば、個々の「土匪」が集団を形成する際の組織基盤は何であろうか。『順天時報』の「曹匪鉅案駭聞」なる記事は、「伝帖」して衆を集めていた大刀会首徐某について記しているが、<sup>(56)</sup>「土匪」は秘密結社等を通じて相互に連携を保っていたものと思われる。平常は農村で各自の生活を営む「土匪」は、連絡をとりつつ期を約して集団で活動した。頭目以下の小集団は或いは流動的であったが、何百何千という「土匪」の一団の大部分は土着の「土匪」であり、少なくともこの時期の「土匪」に関しては流寇的「土匪団」を想像するのは妥当ではない。

「土匪」の活動は「持てる者」からの「槍劫」であり、そのスローガンは「劫富濟貧」であった。<sup>(57)</sup>特に山東の「土匪」は水滸伝以来の「義賊」の伝統を強く受継いでいたと言われる。<sup>(58)</sup>「人氣が荒い」とされ、義和拳の伝統を持つ山東民衆は、武術を好み義俠や

武勇の芝居を熱愛したというが、<sup>(59)</sup>そうした社会の中から誕生した「土匪」の世界は民衆の願望を体现するものだったと言えよう。

斯くして、義和団の発生之地であり、「滅洋」の伝統を継承してきた山東西南部の「土匪」が、任青和を中心とする反「屯佃」闘争に関わっていたのも当然であった。屯民との連携は農村から誕生し農村を基盤とする「土匪」であればこそ可能だったのであり、王際明が再度新たな「土匪」闘争を継続し得たのもその為であった。

曹州に始まり兗州、沂州、泰安一帯へと拡大していった<sup>(60)</sup>一九〇六年の「土匪」闘争は、当時山東で漸く活発化してきた革命派に注目され、僅かではあるが「土匪」に対する工作もなされていた。<sup>(61)</sup>「曹匪」闘争は既に辛亥革命へ向けての胎動を示すものであった。

### 三 萊陽・海陽民衆運動

一九一〇年に萊陽、海陽両県で展開された民衆運動は、その規模からいっても省権力のみならず国家権力をも根底からゆすぶるものだった。<sup>(62)</sup>既に発表された王仲「一九一〇年山東萊陽群衆的抗捐抗税闘争」、狭間直樹「山東萊陽暴動小論」<sup>(63)</sup>を参考にしつつ、先ず萊陽について、簡単にその経過を辿りたい。

当時の萊陽では、「三害二蠹」と称される劣紳グループⅡ王圻・王景嶽・于贊揚・張相謨、葛桂星等が知県朱槐之と結托し、「新政」の名の下に私腹を肥やしていた。<sup>(64)</sup>従来「自封投櫃」であった

錢糧は、朱知県の赴任（光緒三十三年）と同時に劣紳たちの五大錢莊に納入することになり、その際の制錢、銅元の換算率操作は農民の負担を増大させた。<sup>(65)</sup>その上、「契紙税」から「戯捐」に至る凡ゆる苛捐雑税が課せられていた。<sup>(66)</sup>

一九一〇年は先述した如く大災害の年であったが、災荒に備えて穀物を供出させて設けられていた「社倉」の「積穀」も、私利を貪る王・于等の手により現金化されていた。<sup>(67)</sup>天災に加えて劣紳の穀物買占めによって糧価は高騰し、<sup>(68)</sup>正に「農民の欠食者、十に八九に居る」<sup>(69)</sup>という状況を呈した。そうした中で猶も官紳から納税を迫られた時、民衆は「社倉」の「積穀」を以てそれに代えることを「群議」し、<sup>(70)</sup>先ず社長曲詩文等に要求した。この時の社長層の対応には興味深いものがあるが、姜爾綬、于祝三は自ら出穀することにより「平和」的解決を図ったのに対し、貧しい曲詩文にはそれも不可能であった為、民衆を前にして止むなく「衆議」に従ったという。<sup>(71)</sup>民衆の力が社長層を突き動かし、次の段階へと闘争を推進したのである。

こうして宣統二年（一九一〇年）四月十三日、西北郷の飢民七百余人が関帝廟に結集した。<sup>(72)</sup>「滋事」を恐れた曲詩文は村長三十余人及び他の社長と共に、王圻等に「積穀」の清算を要求したが果さず、県署へ訴えようとして逮捕された。これを聞いた民衆は県署を包囲し、「経管紳士に伝質して十日内に算帳し、欠者は追賠するを允す」ことを知県に認めさせた。<sup>(73)</sup>しかし、約束は一向に実現されず、四、五千人の民衆が再び四月二十五日、九里河に集



合し、遂に知県に迫って劣紳の革除以下六項目の要求を承認させ「曲詩文無罪之論」を出さしめるに至った。<sup>(74)</sup> 民衆の攻撃が直接の収奪者たる劣紳に向けられたのは当然だったが、その革除によって知県は自らの保身を図り、長年王景嶽等に恨みを抱いていた民衆は、その家屋を焼打ちにして積怨を晴らした。<sup>(75)</sup>

一方、処分された劣紳は、巡撫孫宝琦等に運動し、その結果朱槐之は民衆に譲歩したとして撤任され、五月二十日に新知県奎保が萊陽に到着した。奎保は着任と同時に先の難捐免除の約束を反故にし、曲詩文の逮捕令を出した。<sup>(76)</sup> 更に二十二日には、楊耀林が先鋒隊を率いて到着した。この為、曲詩文は辛うじて逃亡したが自衛の為に決起した民衆は容赦ない砲撃により多くの死傷者を出した。<sup>(77)</sup> しかし、支配者側から「土匪」弾圧として片づけられたこの二十六日の虐殺を契機として、民衆は全県の規模で闘争に立ち上がり、翌日九里河には十五万人が結集した。<sup>(78)</sup> 農村から続々と決起して県城を包囲した民衆は、城内の支配者層を恐怖させるに十分であったが、他方彼らも着々と弾圧の準備を進めていた。六月二日、総兵李安堂及び第五鎮第十協統領葉長盛の率いる軍隊が萊陽に進駐し、農民軍に対する招撫を行なったが、猶も断固包囲を続行する曲詩文以下西北郷民衆に対し、七日に攻撃を開始した。<sup>(80)</sup> 武器も殆んど持たぬ民衆と政府軍では、その勝敗は固より言うまでもなく、掠奪、焼打ち、夥しい死傷者と、地獄絵そのものの状況の中に、萊陽民衆の闘争は一応の収束を余儀なくされた。以上が簡単な経過であるが、ここで民衆の組織基盤となった連

荘会とその指導者曲詩文に関して触れておきたい。連荘会の名称は、当時一般的に上からの郷村自衛組織であった団練と同義のものであったと思われる。<sup>(82)</sup> 実際には在地郷紳地主の指導下に適宜に組織されていた。<sup>(83)</sup> 萊陽の場合に関しては、『東方雜誌』に、「連荘会会長曲詩文」に言及して

初朱令勒逼各捐、城北八社連絡一氣、擬図抵制、名曰連荘会とあり、又直隸總督陳夔龍が、

該邑永庄社社長于祝三、素倡反对新政抗不納捐之議、村民多歸附之。曲士文（即曲詩文）及其同志、……本年（宣統二年

——引用者）正月間、曾在唐家奄地方、糾衆五十余人、拜盟立会、蓄意与官紳為難<sup>(85)</sup>

と報告している。曲詩文を会長として、「凡そ官府の明文無きの苛捐は概ね抗して納めず」という于祝三等の社長たちが連合し、「連荘」が拡大していったものと思われる。当初から苛捐雑税への抵抗を目的として成立したことから、郷村の「自衛」がむしろ官紳勢力と対抗することに於いて果され得るという点で、性格も従来の団練とは異なっていた。<sup>(86)</sup> それは社長層を中心としていたことから、一応平和的解決を目指し、暫定的で組織性の弱いものではあったが、清朝支配体制は支配階級の末端に位置する社長層にも、抗捐抗税勢力を登場させていたのである。

しかしながら、萊陽の闘争では当初より民衆の力が社長層をやむなく動かしており、その度に社長たちは民衆の戦闘性に動揺し請願という平和的手段で「滋事」の回避に努めたが、それらは彼

らの幻想が裏切られてゆく過程でしかなかった。社長層の中でも連荘会会長として指導的立場にあり、民衆からの信望も厚かった曲詩文は、こうした過程の中で常に民衆の擁護を受けながら、やがて真に農民の側に立つ指導者へと変化していったものと思われる。そして十五万民衆の決起の段階では、もはや支配者層への幻想を完全に絶ち切った曲詩文を見ることが出来る。闘争は全県的規模へと拡大し、民衆の団結力と組織力が発揮された。全県各家に見張又は食糧運搬人を出すように「伝牌」が回され、<sup>(87)</sup>「囲城的」<sup>(88)</sup>、<sup>(89)</sup>「囲城」の報告に拠れば、彼らは厳格な規律を保っていたといふ。破れ笠に白シャツ、ズボンの裾を捲り上げた七十歳前後の痩せこけた老人曲詩文は、和解の申し出を「不能調説」と毅然として撥ねつける紛れもない民衆の指導者となっていた。だからこそ民衆をして

非將吾萊陽民殺絶、決不肯將為民請命之曲詩文獻出、亦決不肯承認各種苛捐<sup>(90)</sup>

と言わしめる程の信頼を得ることが可能だったし、民衆はその指揮の下で極めて短時間の内に農村から次々と決起し、団結して闘争を継続発展させていった。当初抗捐抗税の平和的解決を目指して社長層により結成された連荘会は、ここに至って明確に権力構造に敵対する民衆の全県的「連荘」の役割を果すこととなった。民衆を「自衛」の名の下に「秩序」の枠にはめ込もうとする従来の団練組織は、むしろそうした枠を越えて全県民衆を組織する基盤となったのであり、それを可能にしたのは民衆の共通利害と連

帯意識であり、革命的エネルギーであった。

さて、萊陽における斯かる闘争と期を同じくして、海陽でも錢糧徴収の問題に端を発する民衆運動が展開された。<sup>(91)</sup>

海陽では清末の制錢不足によって錢糧の制錢による納入が困難となり、各社の請願を入れて呉知県は銅元のみによる納税を許可した。ところが宣統二年二月に着任した知県方奎は、再び銅元・制錢七対三の比率へ戻すことを命じた。そこで民意を代表した宋煊文は、制錢及び各種浮収の撤廃を要求したが、方奎により子の燠吉共々逮捕されてしまった。激怒した民衆は回状を廻して期を約し、宋父子の釈放を求めて県署に迫ったが、方奎はこれに対し弾圧を以て臨もうとし、一層憤激した数万の民衆によって、四月二十九日に県城が包囲され、宋父子は釈放された。民衆は一旦解散したが、官吏の言葉を用いない西郷民衆は県署を焼打ちし、「莠民」及び「無衣食者」は「結党」して苛捐雜税への反対を掲げて「劫掠」を継続していた。<sup>(92)</sup>しかし、既に萊陽民衆と相通じていると言われたこの海陽の闘争も、萊陽への大軍派遣と同時に収拾された。

以上の如く、萊陽・海陽の民衆運動は、清朝の「新政」による苛捐雜税に対する反対闘争であったが、民衆は同時に帝國主義とも敵対せずにはおれなかった。ドイツは海陽附近に魚雷艇を派遣し、ドイツ兵を駐屯させるなど、孫宝琦を援助して「防匪」に努めたのだ。<sup>(94)</sup>帝國主義と結託した孫宝琦に代表される従来の保守派が、萊陽・海陽闘争を「匪徒滋鬧」に終らせようとしたのは明白だった。

しかし、これに対し二県の民衆運動を世に知らしめる役割を果たしたのが、六月初旬の山東出身の御史王宝田による上奏であった。「官逼り民変ず、撫臣の処置宜きを失す」という彼の上奏は清朝に採り上げられ、十二日には直隸総督陳夔龍に実地調査が命ぜられた。<sup>(95)</sup>だが、その報告は「死党」百余人の「匪衆」を除く外は「郷愚」であるとし、曲詩文を「罪魁」とする孫宝琦のそれと大差ないものだった。<sup>(96)</sup>清朝はこの覆奏に基づいて、七月二十日、曲詩文に罪を被せ弾圧を正当とする上諭を出した。<sup>(97)</sup>一方山東省出身の京官等は、王宝田の上奏に呼応して実態究明の活動を開始し、八月六日には王宝田らにより「山東旅京官商学三界同郷大会」が召集され、実地調査に基づいて孫宝琦弾劾運動が盛んに展開された。<sup>(98)</sup>既に世論は孫宝琦を中心とする保守派を政治舞台から下すことを要求していたが、それにも拘らず清朝は、八月十六日に孫宝琦へ再調査を命ずる上諭を出したのみだった。<sup>(100)</sup>

さて、中央においてと同様に山東省諮議局内部では、東三府の「急進」派と西七府の六十二人の「保守」派<sup>(101)</sup>「六二党」の抗争が展開されていた。<sup>(102)</sup>中央の山東同郷会から「世論」を代表する機関としての責任を追求された諮議局は、「保守」派の孫丕承と「急進」派の王志勲を調査に派遣したが、官紳の責任を追求する王と「楊・奎は功多く罪少し」として官紳を擁護する孫は真向から対立した。王志勲等は「匪徒滋鬧」は「地方官弁理不善の致す所に係る」として朱槐之・文淇の処分を命じた七月二十日の上諭を遵奉して、官紳の処分を主張したが、議長以下諮議局議員の多数は

彼らを「曲党」「阿附京官」と誹謗し、遂に耐えかねた王志勲等五名は辞職するに至った。<sup>(104)</sup>諮議局自体地方官紳の利害を直接に反映する存在であった為、「急進」派は少数派でしかあり得ず、又「急進」派も、萊陽民衆の抗捐抗税を「叛逆」に近いものとして大官の責任を回避した七月二十日の上諭を「平允」なるものとして、官紳処分のみを争点とするに止まった。

しかし、学界、ジャーナリズムと立憲派を中心につくられていた世論は、孫宝琦に「弁理不善之官紳」の処分を要請する覆奏をさせ、<sup>(105)</sup>十月六日の上諭を以て孫宝琦を除く一連の關係官紳が処分された。こうして立憲派は民衆運動を背景にして、保守派勢力を部分的にはあれ一掃したのである。

#### 四 民衆運動の全省的高揚

辛亥革命前夜、萊陽・海陽民衆運動とほぼ同時期に、霑化県及び濰県に於いても民衆運動が展開された。両県の闘争をも検討して、山東全省の社会状況を概観してみたい。

霑化知県沈桐は、県境沿海一帯に荒田が存在するのに着目し、光緒三十二年に民間に貸与して耕作させ、五年後の佃租徴収を定めた。<sup>(106)</sup>ところが、宣統二年春になって沈桐は約を翻し、「春租五千両」を徴収することとした。抗議する民衆に、沈桐は「種田して納糧せざるは刁民なり」と刑罰を以て迫ったが、前年の収穫が皆無であった上、春には霜害を被った民衆に佃租など捻出できる

はずもなかった。依然納租を迫る知県に耐えかねた民衆百余名は武定府へ訴訟した。知府は沈桐に嚴重な注意と被災地調査を命じたが、調査に赴いた彼の欺瞞は誰の目にも明らかだった為、激怒した「民婦」百余人が行動を起した。均しく四十才以上の婦人たちは沈桐の寓居へ集合し、「子売り女を鬻」いで生活の困苦と納租の不能を訴えた。これに対し知県は、村長等に婦人たちの夫の逮捕を命じたが、一度逮捕すれば必ずや「激変」を醸成せんことを恐れた村長は、陽に命令に従う素振りを見せながら、陰に「丈放局委員」程令及び陳令に報告した。報告を受けた二人は一方で民衆を宣撫し、他方で沈桐に免税を勧諭した。更に「利貴局墾務委員」毛令も忠告したが、沈桐は反って「荒租五千串」を民衆に要求し、その勢いは「星火」よりも急であったという。<sup>(108)</sup>遅延すれば「非刑」に処するといふ知県に対し、民衆は遂に「暴動」を起して彼を殺害し、「公憤」を洩らそうと決議したが、その爆発直前で抑止する者が登場した。「幸い各紳士力めて禁阻を為し、文明をもって对待すべきを勧め、因って府に赴き喊控するを議定す」とある如く、紳士層は民衆の力に恐怖し、訴訟という<sup>(109)</sup>「文明」的解決を図ったのである。四月二十二日武定府へ赴いた二百余名の民衆は、「此の次方守若し允許せざれば、惟力を尽して死抗するのみ」と訴えたというが、飽く迄闘い抜こうとする民衆の決意は堅固なものであった。

残念ながら以後の経緯はわからないが、ここで注目されるのは、民衆の闘争性と団結力が知県を取巻く支配者層をして平和的

解決に奔走させていることである。最早支配者層は従来通りの暴力的支配の不可能を知らされ、民衆の力を無視し得なくなっていたと言える。

そこで次に、濰県の小商人層を中心とする民衆の運動を紹介する。

着任以来、「毎に新政に名目を借り、以て漁利の策を為す」と言われた濰県知県楊承沢は、清朝支配者層の典型であった。該地における「新政」実施は、例えば戸口調査をみると、様々な名目で千六百余人が調査に関与し、毎月五万金の経費を要するというものだった。莫大な経費は各村に割当てられ「按畝勒捐」された為、「民間大いに其の擾を受くと雖も、而も各員等大いに其の利を獲す」というものだった。その上、一九一〇年に至っても戸数は未だ明らかにされていなかった。

こうした民衆には負担でしかない「新政」実施の中で、知県と紳士陳孝奎との結托による「勒捐」に対して、小商人層を主とする民衆は罷市という手段で抗議に立ち上がった。<sup>(110)</sup>これに対し、知県と陳は「官紳体面」の為に武力弾圧を図るが、民衆は「苛捐免ぜざれば決して開市し難し」という断固たる姿勢を示し、先に陳が設立した錢莊の濫発紙幣三十余万の使用を停止した。次いで民衆は錢莊へ押しかけ「兌錢」を要求したが、追し寄せる人波に慌てた知県は、警兵二百余を率いて弾圧に向かった。時に怒り極まった民衆は知県を取囲み、「紙一張破れば当錢する能わず。使用すると否とは、其の権我に在り。官烏んぞ強迫する能わん」と叫

んだという。その勢いに恐れをなした知県は、翌日の全額「兌銭」を条件に民衆に解散を勧告し、民衆もこれに従ったが、翌日正午に錢莊の倒産を知るや、陳の家へ行き「兌銭」を迫った。陳は警兵二十名で守備を固める一方、「商董」に調停を求め、「兌銭」を約して漸く民衆を解散させることができた。

以上、維県民衆運動も官紳結託による「新政」下の収奪に反対した、小商人層を中心とする抗捐抗税闘争であった。ここに於いても楊知県及び紳士陳孝筌は「商董」という調停者を間に立て、民衆に譲歩せざるを得なかった。

斯くして辛亥革命前夜の民衆運動は、山東各地で支配体制の土台を揺がしていたが、ではこれらの諸闘争は、各々全く孤立して個別に闘われたのだろうか。萊陽闘争は政府軍の血腥い弾圧下に一応の収束を余儀なくされたが、半プロレタリア的貧農による大規模な決起は、山東民衆へ大きな影響を及ぼさずにはいなかった。萊陽民衆へ直接の援助を申し出たものとしては、七百余名が海陽乳山口から登岸して該地に潜入し、各村に分赴して曲詩文に協力しようとした例がある。<sup>(113)</sup>更に栄城県の「鬚匪」と萊陽「乱民」の相互援助も伝えられている。<sup>(114)</sup>又、棲霞県及び招遠県では「民情靖まらず」<sup>(115)</sup>、附近の州県は「亦將に響應せんとす。危、一髮の如し」<sup>(116)</sup>という状態だった。

影響は半島部のみならず、遠く曹州一帯にも波及した。『順天時報』は「萊陽匪乱方に靖まり、曹州匪警又起る」と報じてい

る。<sup>(117)</sup>大雨と物価騰貴の中で「乱民」が「勢いに乗じ」て決起したと報道されているが、濮州に結集した「会匪」一千余人が皆曲詩文のための復讐をスローガンにしていた如く、<sup>(118)</sup>「曹匪」の行動は萊陽民衆への連帯からなされたものだった。<sup>(119)</sup>

このように各地民衆が萊陽闘争に呼応したが、その実践において活動したのは他ならぬ「土匪」であったことは注意されねばなるまい。萊陽の連荘会が農民側の組織として機能していったことは、民衆の大きな力を示すものであったが、弾圧という形で闘争に一応の結着がつけられた時点で、民衆は旧来の鄉村「秩序」の下で一層過酷な収奪を被らねばならなかった。しかし他方では、六月半ばに「匪党」一万余人が新捐に反抗して官紳と抗争し、<sup>(120)</sup>十七日には「匪民」が官兵と対戦するという事件も発生し、表面上は平静のようでも「余匪潜伏、造謠惑衆」という状態が存続したことも事実であった。<sup>(121)</sup>多くの難民は「土匪」となり「海寇」<sup>(122)</sup>となっていた。<sup>(123)</sup>『民立報』は、青島以東寧海以西の海面及び濰県以西聊城以東の平原の「匪」は、大半が帰るべき家を失った萊陽民であったと伝えている。某萊陽人がこの「海盜」中に従兄弟を見つけ、何故に盜となったかを問うたところ、「吾が父母妻子十余人、同じく汚吏の手に死す」と述べ、憤恨極まって賊となり、「衆兄弟と聯結し以て吾が宿恨を洩らさんと擬すのみ」と答えたという。この話の真偽の程はもとより定かではないが、全てを失った或いは元の「秩序」を肯んじない民衆が、「匪」仲間に「同

志」ある者を見出し、共に闘おうとするのは大いにあり得ることだと思われる。<sup>129</sup>

更に、「逆首」として逃亡を余儀なくされた曲詩文も、「鬚匪」郭鳳年と「勾結」し、辛亥革命時期には萊陽林家園で「聚党」して官兵と対戦するなど、巡撫孫宝琦をも恐怖させた。<sup>126</sup>彼も又、「土匪」闘争の中に闘いを継続していったのである。かの王宝田は、山東の複雑な危機的状况を把えて、

現在歳比不登、江淮阻飢、流民入東境者不下数万、兗曹一带土匪讜起、幾于無日不搶、無夜不警、而瀕海各県、又有鬚匪竄入擄掠、且有姦党暗行誘結、並邀二邑（萊陽・海陽―引用者）乱民入伙、資以軍火、使南北逆氛連成一片、則牽動全局、急難收拾。<sup>127</sup>

と述べている。山東全省で一体となりつつあったこのような民衆の革命的エネルギーは、辛亥革命を準備していった原動力であった。

他方、一九〇六年以来活発化して来た同盟会を中心とする革命派は、「曹匪」への若干の工作を除いて、その活動の殆んどが学堂を中心になされていた。<sup>128</sup>同盟会の影響下にあったと思われる山東の留日学生たちは、諮議局への不満から「維持会」を發起している。彼らは、萊陽・海陽の「変」、濰県・利津の「擾」、沿岸の「胡匪」、曹州府内の「土匪」という内憂に加え、英・独・日の「鼎足」する外患を抱えた山東の「累卵の如き」危機を、留学生監督蔣衍昇（同盟会員）を通して諮議局へ訴えた。更に、地方

自治公款、銅元による納糧、列強の侵略への対応等八項目の要求を提出したという。<sup>129</sup>彼らの対外認識は的確だったが、各地の擾乱を憂慮しつつ、むしろ列強の侵略からの省の保全、省政の強化を望んでいたことに彼らの「秩序」志向が窺われる。

こうして、武昌蜂起が起り、全国的革命情勢の到来に山東でも独立の気運が高まると、同盟会の大勢は「乱萌」を除きながらの「秩序」ある独立路線を採った。<sup>130</sup>革命派は、法政学堂教員として彼らと連絡のあったかつての諮議局「急進」派丁世嶧等と共に、反諮議局の点で「山東全省各界聯合会」を成立させ、軍部と孫宝琦を突き動かして山東独立を成し遂げたのだった。<sup>131</sup>

## むすび

二十世紀に入り本格化した帝国主義支配と清朝の「新政」実施下で、山東民衆はその主体性において義和団運動を継承しつつ反帝反封建闘争を展開していった。農村における個々の民衆運動はその過程で支配者層の末端に調停者を生み、やがて收拾されていくという形をとった。そこには民衆の力の大きさが示されていたが、調停とは又、支配の安泰を図る支配者層の保身の為の妥協でもあった。だが、萊陽民衆運動にあっては、民衆は社長たちを更に一步突き動かしながら闘争を拡大、前進させ、遂に国家権力と正面から対峙するに至った。これは支配体制を大きく動揺させるものであったが、そこでも零細な「土地所有者」を中心とする民

衆の決起がひとたび弾圧を被った時点で、民衆は一応以前の「秩序」に戻らざるを得なかった。そうして闘争は「土匪」へと継承されていった。「土匪」の存在は民衆運動の孤立分散性がある程度克服し、山東各地民衆の革命的エネルギーは一体となって辛亥革命の原動力となり得たのである。

一方中央においては、民衆運動を背景として、調停者としての立憲派の抬頭がみられた。済寧屯民の闘争に際しての給事中艾慶瀾の存在は、当時の政府及び巡撫を動かすに至らず、その実態は民国以後迄明らかにされなかった。しかし、萊陽・海陽の民衆運動はその規模の大きさもあって、御史王宝田の上奏により各界に多大な反響を巻き起し、山東出身京官は官・紳・商の「連合」と「世論」によって一定の勝利を獲得すると同時に、支配階級内における地位の保全を図り得たのである。彼らはこれ以降も「該省公益」に関心を寄せ、監視を怠るまいとした。<sup>(132)</sup>

こうした民衆運動の高揚の中で、山東は独立を達成したのであるが、間もなく袁世凱の工作により独立取消という事態に立ち到った。<sup>(133)</sup>それは「山東全省各界聯合会」の主導権が立憲派に掌握され、「六二党」からの参加を許容し、更に他ならぬ孫宝琦を都督に立てたことから生じたものだったが、根本的には、革命派も民衆運動を革命へと導き得なかった点に最大の原因があった。むしろ列強、特にドイツへの警戒心を強く抱いていた為、民衆の「秩序」維持に努めたのであった。山東独立の直接の導火線となったのは、山東を抵当としたドイツからの借款のうわさと山東当局の

ドイツからの借款計画であったが、独立に当ってドイツの介入を防ぐ為と称して、清朝及び帝国主義に忠実な孫宝琦を都督とした、或いはせざるを得なかったことは、彼らの力の限界を示していた。但し、独立を推進しの中で育った人々が、既に帝国主義の侵略に対する強い危機感を抱いており、後に日貨ボイコット、国貨提唱、救国儲金等五四運動へかけての反日運動に活躍していたことを、ここで指摘しておかねばならない。<sup>(135)</sup>

それにしても、半植民地中国の民衆はここでも又帝国主義と敵対していたのである。即ち、独立取消の後に山東西南部を中心とする民衆は、独立取消をドイツの圧力の故として、教会を襲撃するなどの排德風潮を起したことは注目に値する。斯かる動きをも含めて、民国以降の民衆運動の検討が必要となるだろう。<sup>(137)</sup>

#### 註

- (1) 歴史学研究三一二、一九六六年。
- (2) 狭間直樹「山東萊陽暴動小論」(東洋史研究二二―二、一九六三年)、石田米子「辛亥革命時期の民衆運動」(東洋文化研究所紀要三七、一九六五年)。
- (3) 小島淑男、西川正夫、清水稔、狭間直樹、中村義、前田勝太郎、北山康夫等の諸氏の研究。尚、辛亥革命時期の農民運動の研究動向に関しては、石田米子「最近の日本における辛亥革命研究の諸成果をめぐって」(東洋史研究三九―一、一九八〇年)を参照のこと。

- (4) 狭間直樹前掲論文、嶋本信子「白朗の乱にみる辛亥革命と華北民衆」(上)、『中国民衆反乱の世界』汲古書院、一九七四年)、内山雅生「民国初期の民衆運動——山東省の場合」(『講座中国近現代史』三、一九七八年)。
- (5) 内山雅生「近代中国における地主制——華北の農業経営を中心として」(歴史評論三一、一九七六年)、同「近代中国における葉煙草栽培についての一考察——二〇世紀前半の山東省を中心として」(社会経済史学四五—一、一九七九年)、吉田滋「二〇世紀中国の一綿作農村における農民層分解について」(東洋史研究三三—四、一九七五年)、同「二十世紀前半中国の山東省における葉煙草栽培について」(静岡大学教育学部研究報告・人文、社会科学篇二八、一九七七年)。
- (6) 神戸輝夫「清代後期山東省における『団匪』と農村問題」(史林五五—四、一九七二年)の六区分法に拠る。
- (7) 柏祐賢『北支の農村経済社会』(弘文堂、一九四四年)五四頁に拠れば、二十畝未満の小規模経営は華北では合理的経営を行ない得る規模ではなく、五十畝以上においてこそ耕地収益力が大であるという。又、満鉄調査部『北支那の農業と経済』下(日本評論社、一九四三年)三四九頁では華北一戸当りの最低限度を二十五畝内外としている。
- (8) 西超「河南農村中底雇傭労働」(『東方雑誌』三一—一八、一九三四年)六八頁。
- (9) 高勞「山東之苦力」(『東方雑誌』二五—七、一九一八年)に、「從山東省毎年出傭於滿蒙及俄領之苦力、大約三十五万人：此等苦力大多數為農民」とある。
- (10) 狭間直樹「中国近代史における『資本のための隷農』の創出およびそれをめぐる農民闘争」(新しい歴史学のために九九、一九六四年)。
- (11) 天野元之助『山東農業経済論』(満鉄経済調査会、一九三六年)一二六—一二八頁。
- (12) 柏祐賢前掲書五八—六〇頁、薛暮橋『中国農村経済常識』(一九三七年)八二頁。
- (13) 満鉄調査部前掲書七五—五頁。
- (14) 天野元之助前掲書一九六頁。
- (15) 宣統二年七月二二日。尚、時間の制約もあって本稿では一九一一年一〇月一〇日以前は旧暦のままを使用した。
- (16) 『順天時報』宣統三年三月二七日。
- (17) 同右、宣統二年三月二七日、四月一四日。
- (18) 同右、宣統二年四月九日。
- (19) 同右、宣統三年四月二三日。
- (20) 同右、宣統三年五月一〇日。
- (21) 同右、宣統三年三月二七日。
- (22) 同右、宣統三年五月七日。
- (23) 例えば、済寧州では飢民による搶掠が拡大し大乱の激成が懸念されている。(『順天時報』宣統三年三月二七日)。
- (24) 平糶局については『順天時報』宣統三年五月十日に「京城議事会秦君升甫等、提議以官地積儲之倉穀五十余石旋公



益、加糶紅糧水糶十余石、於四月初十日設平糶局、定章、每糧每升較市価減錢一百文」とある。

(25) 『順天時報』宣統三年四月二〇日。

(26) 『民立報』宣統二年一〇月二九日。「粥廠」は郷居の大地主層によるもの。『順天時報』宣統三年五月一二日は「殷実紳董設法拯救、□派二万吊之多、於本州西関組織粥廠」と済寧の場合を伝えている。

(27) John E. Schrecker, *Imperialism and Chinese Nationalism: Germany in Shantung*, Harvard University Press, 1971, pp. 140—149.

(28) これに關しては、「山東における独逸の勢力」(『支那』三一六、一九一二年)、「山東省における石炭業」(同五一〇、一九一二年)、「済南貿易事業」(同四一二、一二三、一九一三年)、David D. Buck, *Urban Change in China: Politics and Development in Tsinan, Shantung, 1890-1949*, The University of Wisconsin Press, 1978, pp. 44—60. 等を参照。

(29) 『清国行政法』第二卷、二六六頁。

(30) 『順天時報』光緒三〇年六月一六日。

(31)(33)(34) 民国『済寧直隸州統志』卷四、食貨志、節録并理屯田原委。

(32) 『順天時報』光緒三〇年四月一四日、四月一七日。

(35) 民国『済寧直隸州統志』卷四、食貨志、衛所屯田加価始

末記。

(36) 同右、卷四、食貨志。

(37) 同右、卷四、食貨志、節録光緒三十年屯戸肇事原委。

(38) 『順天時報』光緒三〇年三月一五日。

(39) 同右、光緒三〇年三月八日。

(40) 前掲衛所屯田始末記では、州署焚毀の発端は直接的には屯民の知州への怒りにあったとされている。しかし著者の『済寧直隸州統志』総纂唐烜は、艾慶瀾の上奏を評価し、自らの非を他に転化せんとした周馥を批判し、更に平和的鎮圧に成功したとされていた尚其亨をも、実は済寧に引き続き起こった鄆城で任青和を処刑したことを挙げて批判している。

(41) 以下、鬪争の経緯は「周馥奏鄆城県屯民任青和聚衆滋事摺」(『山東近代史資料』二—以下『資料2』と略す—所収)に依拠した。

(42) (31)に同じ。

(43)(44) (41)に同じ。

(45) 同右。又衛所屯田は民人に対する典売を禁じられていたが、咸豐の初年以來「民典民売の禁亦固ヨリ行ハレズ田畝屢其主ヲ易ヘ民田ト異ナルコトナク唯屯田軍丁ノ虚名ト之ニ伴フ繁文及積弊ノ存スルノミナリキ」(『清国行政法』第二卷、二六六頁)という。

(46) 孫介人「鄆城県民衆反抗清政府増加屯戸田賦」(『資料2』三頁)。

(47) 『順天時報』光緒三〇年四月一八日。

(48) その影響の大きさは、『民報』臨時増刊『天討』（一九〇七年）所収の「山東省討滿洲檄」に任青和が高く評価されていることから窺える。

(49) 『順天時報』附張、光緒三十二年五月一七日。

(50)(51) 「升任直隸總督袁前山東巡撫楊会奏曹匪肅清保獎出力人員摺」（『東方雜誌』四一〇、軍事、一九〇七年）。

(52) 『順天時報』光緒三十二年七月九日。

(53) 同右、光緒三十二年六月二六日。

(54)(55) (50)に同じ。

(56) 光緒三十二年八月一日。尚、「伝帳」なる集合方法に關しては「湖南土匪の過去現在」（『支那』五一八、一九一四年）を参照。

(57) 同右「湖南土匪の過去現在」。

(58) 長野朗『支那の土匪と軍隊』（燕塵社、一九二四年）では、水滸伝式の土匪は山東附近では認められるが、他の方面では義賊的な所はない、とさえ述べられている。

(59) 橘樸『土匪』（京津日日新聞社、一九二三年、四〇頁）。

(60) 龔書鐸、陳桂英「從軍機処檔案看辛亥革命前群衆的反抗鬭爭」（『辛亥革命五十週年紀念論文集』上、所収）二一八頁。

(61) 同右、二二四頁。「学堂革命党、聞東賊日盛、潜相結納」と宗人府漢主事王宝田が報告している。革命派では郛城出身で曹州普通中学主辦王鴻一が「土匪」との連絡をとっていたと言われる。——夏蓮居「山東独立前後」（『辛

亥革命回憶錄』五、所収）三一八頁。

(62) 『中国科学院歴史研究所第三所集刊』一、一九五四年。

(63) 狭間直樹前掲論文。

(64) 「山東旅京同鄉萊陽事變実地調査報告書」（『資料2』所収）——以下「報告書」と略す——萊陽紳董之劣迹。

(65) 同右、商号包収錢糧之駭聞。

(66) 同右、苛捐種々擾害。

(67)(69)(70) 同右、積穀之虧欠。

(68) 王仲前掲論文。

(71)(72)(73) 「報告書」官紳衝突之情形第一次。

(74) 同右、官紳衝突之情形第二次。尚、民衆の要求は「一革除劣紳、二清算積穀、三悉免雜捐、四清算文廟帳目、五錢糧銅元不折、六巡警不准出城、支費亦須清算」というものであった。

(75) 同右、官紳衝突之情形第三次。

(76)(77)(79) 同右、官紳衝突之情形第四次。

(78) 「山東諮議局議員王志勲調查萊海乱事報告書」（『資料2』三一頁）。

(80) 「報告書」官兵痛擊之慘状。

(81) 『順天時報』宣統二年七月一日、八月一四日。

(82) 神戸輝夫前掲論文では、咸豊期の「連莊会」は団練のうち地方官の統制下になかったものをいい、内容的には団練と同じだとされている。筆者が見た限り、辛亥革命時期では官紳の統制の別なく団練と同一に連莊会の名称が使用さ

れている。

- (83) 狭間直樹前掲論文で、連荘会が恒常的組織でないことが指摘されている。

- (84) 『東方雜誌』七一六、中国大事記、一九一〇年。

- (85) 「直隸總督陳夔龍查明山東萊海兩県滋事情形据実復陳摺」(『資料2』四九頁)。

- (86) 例えば、丁介忱、張学典「蔚県聯荘会鬭争記事」(『近代史資料』一九五五—四)を参照。

- (87) 李蘭齋「对于曲士文事变調解經過略況」(『資料2』六二頁)。

- (88)(90) 『時報』宣統二年六月二六日。

- (89) 李蘭齋「对于曲士文事变調解經過略況」(『資料2』六二頁)。

- (91) 海陽については、主に「御史王宝田奏萊陽・海陽二県相繼煽変請簡派大臣馳往妥籌撫定折」、「山東巡撫孫宝琦奏查復萊陽・海陽二県肇乱情形折」(『資料2』四〇—四七頁)に依拠した。

- (92) 「山東諮議局議員王志勳調查萊・海乱事報告書」(『資料2』三五頁)。

- (93) 前掲王宝田奏。

- (94) 『順天時報』宣統二年八月一日、六月一七日。

- (95) 『宣統政紀』宣統二年六月甲申。

- (96) (85)に同じ。

- (97) 『宣統政紀』宣統二年七月辛酉。

- (98) 「報告書」。

- (99) 『順天時報』宣統二年八月一四日。

- (100) 『宣統政紀』宣統二年八月丁亥。

- (101) 『民立報』宣統二年九月二八日。

- (102) 『順天時報』宣統二年六月二四日。

- (103) 「附王志勳等五人对于諮議局辭職理由書」(『資料2』四頁)、『民立報』宣統二年九月二八日。

- (104) 「山東諮議局議員王志勳、丁世嶧、周樹標、張介礼、尚慶翰辭職緣由報告書」(『資料2』三五—三九頁)。

- (105) 「山東巡撫孫宝琦奏遵旨復查萊海滋事实在情形摺」(『資料2』五七頁)。

- (106) 『順天時報』宣統二年六月二三日。以下特に註記しない限りこの記事に拠る。

- (107)(108)(109) 同右、宣統二年五月一五日。

- (110) 『民立報』宣統二年一〇月四日。

- (111) 『順天時報』宣統二年二月二九日。

- (112) 同右、宣統二年七月二日。以下、これに基づく。

- (113) 同右、宣統二年七月一〇日。但し曲詩文はこの申し出を断つたとある。

- (114)(116) 同右、宣統二年六月七日。乳山口から登岸した者たちは、或いはこの「鬚匪」であったかもしれない。

- (115) 同右、宣統二年六月二八日。

- (117) 同右、宣統二年六月二四日。

- (118) 同右、宣統二年七月三日。

- (119) 同右、宣統二年八月三日。
- (120) 『時報』宣統二年六月二〇日。
- (121) 『順天時報』宣統二年六月二十九日。
- (122) 同右、宣統二年六月二一日。
- (123) 同右、宣統二年七月一〇日。
- (124) 『民立報』一九一二年二月二七日。
- (125) 『順天時報』一九一一年十月二〇日。
- (126) 『宣統政紀』宣統三年八月戊午。
- (127) 前掲御史王宝田奏。
- (128) 王麟閣「辛亥前之革命運動」(『資料2』六七頁)。
- (129) 『民立報』宣統二年一〇月一四日。学生により提議されたのは「(一)急宜招練常備軍以備防禦外侮案、(二)嚴勘青島租界案、(三)妥籌地方自治公款案、(四)納糧統用銅元案、(五)擴張學堂宜取開放主義案、(六)留學官費生定額案、(七)日本在龍口越權侵佔案、(八)整頓全省警察案」の八項目である。既に日本の進出が危機感を以て把握されていることは注目に値する。尚、龍口の件については『民立報』宣統二年九月一二日を参照。
- (130) 「黃県革命史実」(『資料2』一二七頁)。
- (131) 王墨仙「辛亥山東獨立記」、孫宝琦編「孫宝琦的仮獨立」(『資料2』所収)。
- (132) 『順天時報』宣統二年一月二六日に拠れば、柯邵忞、王宝田等を中心として「魯省旅京議事會」が創設され、「山東雜誌」の編集、「會所」の建築などの動きを見せ、「該

省民氣の公益に勇なるを見る可し」(同、宣統三年一月二八日)と言われる程であった。

- (133) (134) 中国科学院山東分院歷史研究所「試論辛亥革命時期的山東獨立運動」(『辛亥革命五十週年紀念論文集』下、所収)

(135) 諮議局「急進」派であった張介礼等は「東亞和平維持會」の中心人物であり(味岡徹「第一次大戰初期の中國民族運動」『世界史における地域と民衆』歴史學研究別冊特集、一九七九年、参照)、その他五四運動へかけて山東省民の果たした役割は大きい。野沢豊「シベリア戦争と五四運動」(同右、一九七九年)ではそうした問題をも提起されている。

- (136) 『順天時報』一九一一年二月二〇日、二月二六日。

(137) 内山雅生前掲「民國初期の民衆運動—山東省の場合」参照。

#### (後記)

本稿は、一九七八年度に東京女子大學史學科に提出した卒業論文の一部を、若干の訂正、加筆を行い纏めたものである。

(一九八〇年一月)